

令和7年度第1回 網走市総合教育会議 議事録

1. 開催日時 令和8年3月24日(火) 開会 14時00分
閉会 15時20分

2. 開催場所 網走市庁舎 3階 会議室301-303

3. 協議事項

(1) 網走市内の高等学校のあり方について

(2) 網走運動公園再整備構想について

4. 出席委員

網走市長 水谷 洋一

網走市教育委員会

教育長 木野村 寧

委員 佐々木 砂宗 (教育長職務代理者)

委員 池田 真哲

委員 鴻巣 知香子

委員 新谷 正樹

5. 会議に出席した事務局職員

学校教育部長 高橋 善彦

社会教育部長 伊倉 直樹

学校教育部次長 小中 理司

学校教育課長 里見 達也

学校教育課参事 中野 敏博

スポーツ課長 大西 広幸

スポーツ課参事 佐藤 潤一

学校教育課庶務係長 北村 正人

6. 一般傍聴者 なし

報道機関 なし

7. 議事の経過 別紙のとおり

【14時00分 開会】

高橋学校教育部長

皆様お疲れ様でございます。定刻となりましたので、ただいまから令和7年度第1回網走市総合教育会議を開会いたします。開会にあたりまして、網走市長よりご挨拶申し上げます。

水谷市長

着座にて失礼いたします。いつもありがとうございます。一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

日頃から教育委員の先生方には大変な教育行政に対しまして、ご尽力をいただいておりますことに改めて感謝を申し上げたいと思います。

今日は「高等学校のあり方」そして「網走市運動公園再編整備構想」この2点についてご協議をいただきたいと思っております。

高等学校、今2校あるわけでありましてけれども、この2校を残すということを前提に、それぞれの学校の特色を地域としてどう出していくのか。現在、80名近い中学生が外に出て行き、80名近い方がこの2つの高校に来ている。そうした中であって、いかにしてこの高校を魅力化し、他の地域からも人が集まり、地元の高校生が残れるような、そんな高等学校のあり方を検討していきたいと思っております。

道立の学校でありますので、隔靴搔痒（かっかそうよう）の感はあるわけでありましてけれども、少子化の中で高校のあり方は地域もしっかりと考えていかなければならない課題だと思っておりますので、教育委員の先生方にはぜひご尽力を賜ればと思っております。

もう一つは、運動公園の再編整備構想についてであります。施設の老朽化が進んでおります。人口減少という社会のあり方において、施設はシュリンク（縮小）していかなければならないものだと考えていますが、どこまで機能を残していくのかといった議論は、やはりしていかなければならないと思っております。

今回の議会でもそうだったのですが、財政の問題というのは、私が市長になってからあまり議論がなかったのですが、最近では自治体の財政問題が話題になってきていることもあり、網走市においても同じ尺度で議論されることが多くなったという印象を持っております。

確かに人口が減ってまいりますので、財政もシュリンクしていく話ではありますが、やはり都市機能としてどこまでこの街は社会教育施設を残していくのかといった、機能を含めた議論は必要だと思っております。

再編整備にあたりまして、安全と持続可能な環境、こころをこら辺をご議論いただければと思っております。今日はこれらの事項について、市長部局と教育委員会部局で進むべき方向を共有できればと思っておりますので、短い時間ですがどう

ぞよろしくお願いいたします。

高橋学校教育部長

ありがとうございます。それでは、この後の議事進行につきましては市長にお願いをしたいと思います。

水谷市長

協議事項1「網走市内高等学校のあり方」について、事務局から説明をお願いします。

中野学校教育課参事

網走市内の高等学校のあり方についてご説明申し上げます。資料は別紙2「網走市内公立高校の存続及び魅力化に関する協議成果とアクションプラン」の2ページをご覧ください。

本協議会は、生徒の市外流出に歯止めをかけ、地域の中核となる網走南ヶ丘高等学校及び網走桂陽高等学校の2校の存続を図るため、行政と学校、保護者、経済界が一体となり、両校の魅力向上、特色化の教育環境の整備を目指すものです。

現在、網走市内からは毎年80名以上の生徒が北見市をはじめとする市外の公立高校へ進学しており、市内の高校にとっては生徒の確保が喫緊の課題となっております。南ヶ丘高校では進学校としての機能維持・向上が求められる一方、桂陽高校においては商業科と事務情報科において定員割れが深刻化しており、従来の学科編成では今後の存続が困難な状況に差し掛かっております。

地域の教育資源を維持し、子供たちの学びを保障するためには、両校の「進学」と「地域密着の探究・キャリアデザイン」という役割分担を明確化し、独自性を打ち出していく必要がございます。

最新の両校の出願状況ですが、南ヶ丘高校が定員160名に対し175名。桂陽高校は普通科80名に対し61名、商業科が40名に対し25名、事務情報科は40名に対し4名ということで、1倍を超えているのは南ヶ丘の1.1倍のみとなっております。桂陽の普通科で0.8倍、商業科で0.6倍、事務情報科は0.1倍という状況です。このまま推移いたしますと、今後数年のうちには間口（学級数）の削減が道教委から示される可能性がございます。続いて、3ページ中段の「令和8年度の取り組みと網走市の支援」をご覧ください。協議会での検討の結果、魅力向上のための方向性として、南ヶ丘高校は「進学と部活動」、桂陽高校は「地域密着とキャリアデザイン」という方向性が示されました。

これを踏まえ、令和8年度の取り組みとして、南ヶ丘高校では大手予備校との戦略的連携による進学校特化の取り組みとして、河合塾と連携し、オンライン個別指導、札幌校での冬季・夏季講習、また塾と予備校と学校が連携した進路サポートを受けられる体制を整備していくものです。初年度の令和8年度は、対象を1、2年生に絞り、各学年10名程度を学校が選定し

て取り組みを進める予定です。また令和9年度には、早ければ特進クラスを南ヶ丘高校に1クラス設置することを学校で検討しており、将来的にそのクラスの生徒に対してこちらの取り組みを実施することを想定しております。

桂陽高校では、地域一体型プロジェクトによる成功と感動の体験として、網走商工会議所夏まつり実行委員会と連携し、夏まつり花火大会の企画・演出を一枠全面的に生徒へ任せることで、実社会での成功体験と感動を教育課程に組み込む取り組みを予定しております。また本事業では全国的な取り組みとして、花火競技大会で有名な秋田県大仙市への訪問も予定されております。

続いて6ページ中段の「中高生アンケートの結果」をご覧ください。両校の魅力向上を検討するにあたり、市内中学3年生と高校生に対し、進路決定に関するアンケートを実施いたしました。回答率は中学生が74.3%、高校生は17.4%でした。

主なアンケート結果ですが、中学3年生のうち、市内の高校への進学希望者が70.7%、市外への進学希望者が29.3%となっております。市外を希望する理由としては「部活動に魅力を感じたから」が最も多く、続いて「地元高校にない学科で学びたいから」「地元高校よりも高い学力・進学実績の高校だから」と続いております。また、市内の高校に期待することとしては「大学等への進学実績」が最も多く、次いで「部活動」「学校行事」となっております。

高校生へのアンケート結果では、市内の高校を選んだ理由として「通学しやすいから」が3割を超え、続いて「学力に合っていたから」「進学に有利だから」となっております。一方、市外の高校を選んだ理由は「部活動」が最も多く41.2%、続いて「進学実績」「地元の高校にない学科」となっております。現在の在籍校に対する満足度は、74.6%が満足と回答しており、進学先に対する満足度は高い状況です。一方、不満と回答した25%の生徒の理由は「校則・規則に関すること」が最も多く、次いで「進路指導やキャリア教育に関すること」となっております。

また、在籍校で大手進学塾の授業を受けられるとしたら受けたいかという問いには、高校生の52%が「はい」と回答しており、関心の高さが伺えます。

この取り組みにつきましては、先日の議会での承認を受けまして、今後各校において取り組みが進められるところです。今後も本協議会において、取り組みの効果検証やさらなる魅力向上策の検討など、引き続き協議を続けていく見込みでございます。この取りまとめについては、新年度に道教委へ報告する予定です。

水谷市長

ありがとうございました。ここは物を決める場所ではないの

で、感想を述べていかなければならないのですが、この高校の話については教育委員の皆さんと結果を共有できているということで、了解しました。

道立高校は、生徒が少なくなれば統合するというのが基本的な考え方であり、全道的にそういう動きだと思います。将来的には入学者数が減ってくれば1校でいいというのが道教委の考え方でしょう。南ヶ丘と桂陽についてはまだ具体的な話は聞いていませんが、岩見沢の東高校と西高校、伊達の高校、紋別や美幌など、各地で統合が進んでいます。

岩見沢東は進学校として活躍していた高校でしたが、統合後に定員割れを起こし、生徒が札幌へ流れてしまうという状況になっています。

やはり学校には歴史や伝統があり、特色があるからこそ「行きたい」「地元だから行きたい」という思いがあります。新設校を作った場合に、何をやりたい学校なのか曖昧な、足して2で割ったような学校を作っても、そこが存続するという保証はないのではないかと。そうした考えをベースに、2つの学校を残しながらそれぞれの特色を出していこうというのが、今回の答申の考え方だと思っています。

協議経過の論点整理を見ると、南ヶ丘は「部活と進学のために塾をやりたい」という話が明快なのですが、桂陽については36項目もの論点が出されており、まだまとまっていない印象を受けます。それぞれ意見は出しているけれど、どういう学校にしたいのかが定まっていない。まとまりきっていない学校に生徒が行きたいと思うかどうか。これは早急に決めていかないと、道教委からは「足して2で割ればいい」という議論にさされてしまいます。その砦になるのが教育委員会やこの協議会だと思っています。これからの高等教育のあり方、中学生の進学のあり方について、ぜひご意見をいただければと思います。池田先生、いかがでしょうか。

池田委員

今市長が言われたように、道教委は数の論理で進んでいくと思いますので、このままでは1つに統合しなさいという事態が来ってしまうと感じます。ただ、「1つになることでこれ（特色化）が達成できないのか」という議論はまだ尽くされていないように思います。個人的には2校あって特色が分かれている方がイメージは明確になりますが、統合しても工夫次第でできることはあるのではないかと。議論を続けながら、たとえば1つの学校になったとしても、生徒のニーズに合うような特色ある学校にしていければ良いと考えます。

水谷市長

網走高校と向陽高校が合併してもうすぐ20年になりますが、「母校愛」を醸成する難しさを感じます。母校というのは地域の活力でもあると思うので、2校存続の議論は大切だと思って

います。

佐々木委員

自分は向陽高校の出身なので、正直なところ桂陽高校に対しては、名前も校舎も違うため、あまり思い入れがないというのが本音です。学園出身者も向陽出身者も、おそらく同じ考えの方が多いのではないでしょうか。

市内に2校ある意味合いとしては、南ヶ丘を進学校に特化させる一方で、桂陽は全く違う観点、例えば地域に残って活躍できる人材を育成するような位置付けにするのが良いと思います。前回、鴻巣委員も仰っていましたが、ドローンの操作を習える仕組みを導入するなど、測量などの分野でも即戦力として活用できるスキルを身につけさせる。進学校化は都会の大手企業への就職に繋がりがちですが、網走の将来を考えると、地元で貢献できる人材を育てる色分けが必要ではないかと思います。

水谷市長

鴻巣先生、いかがでしょうか。

鴻巣委員

私は網走出身ではないので、伝統に対するこだわりはあまりありません。私自身が新設校の5期生だったので、伝統がない中で後輩たちが実績を作って良い学校に成長させていく姿を見ました。

ただ、学校が1つになってしまうと、網走にいるからそこに行くという「義務教育化」してしまい、学力的な競争心や意欲が削がれるのではないかと懸念します。特色として、ドローンのような特別な学びの場を作ったり、南ヶ丘に特進クラスを作ったりと、グラデーションが必要です。実績があるところに行きたいという子供の気持ちを伸ばしてあげられるような魅力が、今の網走には少し欠けている気がします。

水谷市長

新谷委員はいかがでしょう。

新谷委員

南ヶ丘が進学と部活動に特化し、河合塾と連携するというのは政策として明快で良いと思います。今の時代、刺激やきっかけがあれば、昔よりも学力を伸ばすことは容易なはずですが、桂陽については、地域としての担い手不足はありますが、親や子供のニーズとのミスマッチが大きいと感じます。経営者側は「地域に残ってほしい」と言いますが、子供たちの就職希望は10数%程度です。卒業してすぐに地元で働くというニーズは少ない。残す・残さないではなく、魅力化を考えるならば何か新しいアイデアが必要です。

木野村教育長

2校存続という方針からスタートしていますので、そこを第一に考えたい。1校に普通科と商業科を同居させると、目標やゴールが異なり、校内がバラバラになる恐れもあります。です

から、全く異なる特色を持つ2校として存続させるのが理想です。

そのためには思い切った特色化が必要です。桂陽高校の方向性を早く決めなければなりません。今、4間口あっても定員割れが深刻な学科がある状況は課題です。県立岐阜商業のように、特定の分野に特化して「あそこの商業科に行きたい」と思わせるような学校にしたい。

また、校長を公募制やミッション制にして、魅力化のために3年、5年と腰を据えて取り組んでもらう方式も道教委に相談してみたいと考えています。

水谷市長

南ヶ丘の定時制も、入学者数が激減し、今年は6名です。その理由は通信制のN高やクラーク高校に生徒が流れているからです。ライバルは近隣校ではなく、通信制高校になっています。そうした現状を踏まえた特色を作らなければ生徒は集まりません。

桂陽高校の議論の中にある「中間定時制」も面白い視点です。学校の仕組みを分かりやすくする必要があります。出口（進路）もしっかり見せ、実績を積まなければなりません。

商業科から大学進学を目指す場合、単位取得や入試資格の面で工夫が必要です。「学び直し」の機会を設けるなど、進学を希望する生徒への配慮も必要でしょう。

大空高校は、AO入試などの推薦枠を上手く活用して、南ヶ丘よりも良い進学実績を出しているケースもあります。偏差値至上主義ではない戦い方で実績を作っているのは、一つのヒントになるかもしれません。

令和11年度には1学級減が示される可能性があるとのことですので、早急に桂陽高校の特色を明確にする必要があります。南ヶ丘は「勉強と部活」とはっきりしましたが、桂陽が何をするのかを具体的に打ち出していかなければなりません。

木野村教育長

支援に対する効果を出すために、市は塾や花火大会の経費を負担しています。効果が出ないからやめるのではなく、成果を出すための支援を続ける。もし結果が出なければ、別の支援策を考えていく必要があります。

中野学校教育課参事

数年後に、市外へ流出する生徒の数をどれだけ減らせているかが一つの指標になると思います。

水谷市長

主体はあくまで学校です。学校が「こういう学校にしたいから支援してほしい」という施策を出し、それに対して市が設置者の理解を求めめるために支援するという形で行くべきです。

佐々木委員

南ヶ丘の前校長が伊達高校へ行かれましたが、あちらでも河合

塾と連携しています。その事例を参考にしつつ、網走の特色を濃くしていくべきです。桂陽も花火大会の企画などを通じて、新しい形が見えてくるかもしれません。

鴻巣委員

人間関係を理由に市外へ出る子もいるので、環境づくりも大切です。また、桂陽の子だから就職という考えは、今の親子のニーズには合っていません。勉強が苦手でも進学を希望する子は多い。そうしたニーズを無視せず、存続の形を探るべきです。

新谷委員

AIの時代になり、将来の仕事がどうなるか予測するのは非常に難しいです。ただ、シリコンバレーで配管工が1500万円稼ぐような時代ですから、手に職をつけることの強さは無視できません。エッセンシャルワーカーの重要性が増しています。AIにできないことをやる。そういう学びが見える高校なら分かりやすいですね。

鴻巣委員

高校に通いながら起業するのはどうでしょうか。南ヶ丘が進学特化なら、桂陽は「起業して稼ぐこともできる」という形にすれば、親も行かせたいと思うかもしれません。地元で仕事を続ける人口減対策にもなります。

水谷市長

2校存続に向けて、特に桂陽高校の特色を明確にしていくことが今日の大きな課題だと再認識しました。

では2つ目、運動公園の再編整備について、事務局から説明をしてください。

佐藤スポーツ課参事

網走運動公園再編整備構想についてご報告いたします。資料は別紙3の1および別紙3の2です。

本市では人口減少が進み、公共施設の総量適正化が不可欠です。同時に、多くのスポーツ施設が老朽化しております。専門家の調査では、市営球場、スパーク網走、オホーツクドームの3施設は劣化により利用上の問題があり、総合体育館も耐震性に課題があると診断されました。

本構想は、老朽化対策と将来の維持管理費を見据えた適正規模への見直しを両立させ、持続可能なスポーツ環境を確保することを目的としています。

再整備の進め方ですが、まず、スパーク網走とオホーツクドームを統合廃止し、新たな屋内運動施設を建設します。次に、市営球場を廃止し、呼人地区のスポトレ野球場へ機能を集約します。その際、夜間照明を新設して利便性を高めます。総合体育館は、現在の市営球場跡地付近に新総合体育館として建て替えます。

パブリックコメントでは、空白期間の発生や練習場所の減少を不安視する声が寄せられました。これに対し、新屋内施設が完成するまではオホーツクドームを存続させ、空白期間を回避します。

整備期間は約10年を予定しており、来年度から新屋内施設の基本計画に着手します。事業実施にあたっては、交付金の活用、民間活力の導入、脱炭素化によるコスト削減なども検討してまいります。

水谷市長

オホーツクドームは壊れそうなのでしょうか。

大西スポーツ課長

耐用年数を過ぎており、いつ破れてもおかしくない状況です。新施設ができるまでは何とか持たせたいと考えておりますが、早急な対応が必要です。

水谷市長

完成から28年ほどですが、寒冷地ではドーム構造の維持が難しかったのが実態ですね。現在は東京農大の野球部が冬場の練習場として活用していますが、大学の活性化や地域の屋内競技の場として必要だと考えています。スパークと統合し、面積を適正化しながら更新していく。

野球場を潰して体育館を建てるには多額の費用がかかるため、時間がかかるでしょう。まずは緊急性の高いドームから進めることになります。市役所の庁舎も建て、消防庁舎も建て、お財布事情はなかなか大変です。借金残高は減っていますが、中身を精査しながら進める必要があります。

体育館は現在、何が一番危険なのでしょうか。

大西スポーツ課長

ボイラーが古く、毎年どこかから水漏れするなど修繕しながら使っている状況です。

水谷市長

当時は2億円程度で建ちましたが、今はその数倍かかるでしょう。時間は金利と同じで、やれる時にやらないとコストが上がってしまいます。ドームの建て替えは教育委員会でも了承されている。総合体育館も手狭ですし、スキー場のリフトなども調子が悪くなってきています。こうした総合的な施設管理において、理想だけでなく実情に合わせた「ビルド&スクラップ」を明確にする必要があります。

市全体としての公共施設適正化配置計画に基づき、廃止、検討、維持を整理しなければなりません。網走市内にパークゴルフ場が10箇所ありますが、それらもどうするのか、広域で持つべきではないかといった議論が必要です。自治体がすべてをフルセットで持つのは、財政的に不可能です。

全体を考え、教育委員会と相談しながら進めますが、今回はご提言をいただいた方向で検討を進めます。

池田委員、社会教育施設を含めた全体の話としてどう思われますか。

池田委員

市民の利便性を考え投資していく必要がありますが、人口減を考えると投資を回収できるのかという懸念もあり、どうしてもネガティブに考えてしまいます。ただ、どこかで進めなければならぬことですので、時間をかけながら、方向性が間違っていないか確認して進めていく必要があると思います。

水谷市長

佐々木委員、いかがでしょうか。

佐々木委員

10年後の利用者数を鑑み、既存の規模を維持するのか、あるいは一回り小さい規模で賄うのかといった検討が必要です。10年計画の中で、その都度ブラッシュアップして時代に合った計画に変えていくべきだと思います。

水谷市長

施設の大きさについては、人口が減ってもバスケットボールなどの競技を行う人がいる限り、コートサイズは変わりません。競技によって必要な面積が決まってしまう。以前、中体連や高体連の管内大会を開くために観客席が必要だという要望もありました。そうした視点も必要ですね。それで費用も変わってきます。新谷さん、いかがでしょうか。

新谷委員

全体計画をまとめるには、学校教育や社会教育施設を合わせて教育部局で1年くらいかかるでしょう。市長が「こっちが先だ」と優先順位を決め、大きな絵を描かないと議論になりません。

合宿誘致や将来の「種まき」という意味ではある程度の規模を維持したいし、商工会議所からはコンベンション機能の要望もありました。まずは壊れそうなドームから着手し、全体構想を描いていくということだと思います。

水谷市長

体育館は社会教育施設でもあり避難所でもあります。防災機能としての必要性や、複合施設としてのあり方も教育委員会で議論していますか。備蓄品の保管場所なども含め、バランスが難しいところですよ。

鴻巣委員

学校再編も含め、大きな課題です。市長が仰ったように、近隣自治体と共有できる施設、例えば観覧席のある大きな施設は広域で1つ持つといった考えもあり得ると思います。屋根が取れる前に、大きな予算をどう動かすか、現実的に考えなければなりません。

水谷市長

老朽化対策と新築のどちらが効率的か、検討が必要です。今回

いただいたご提言を受け止め、時間はかかりますが具体的に進めてまいります。

今日の議題は大体終わりましたが、事務局から何かありますか。

(「ありません」との発言あり)

了解しました。この2つの課題については、教育委員と市長部局で共有しながら進めてまいります。単体で解決できる話ではないので、連携が不可欠です。総合教育会議を通じて情報を共有し、両輪としてやっていきたいと思えます。本日はありがとうございました。

高橋学校教育部長

ありがとうございます。それでは、以上で網走市総合教育会議を終了いたします。ありがとうございました。

【15時20分 閉会】